

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Pain Medications During Pregnancy: Data from the Japan environment and children's study (JECS)

和文タイトル: 妊娠中の痛みに対する薬物治療

ユニットセンター(UC)等名: 大阪UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Anesthesia

年: 2020 月: 3 巻: 34 頁: 202-210

筆頭著者名: 山田 恵子

所属UC名: 大阪UC

目的: 日本において妊婦の痛みと痛みに対する薬物使用を調べた大規模な疫学研究は実施されていない。本研究の目的は、エコチル調査研究のデータを使用し、日本における非がん性疼痛に対する薬物使用の実態を調査することである。

方法: 我々は、健康関連の生活の質(QOL)を測定する自記式質問票である「SF-8」に含まれる体の痛みを含む質問項目と、面接による薬物使用に関する調査に回答した94,649妊婦を対象に分析を実施した。痛みの治療に使用する医薬品について、妊娠前及び妊娠中の使用割合、中止割合、新規使用開始割合を体の痛みの有無(痛みなし、軽度、中等度以上)ごとに調べた。

結果: 本研究において、妊娠第1期に約50%、第2-3期に約50-60%の妊婦が軽度を含めた身体の痛みを有し、約20%以上が中等度以上の痛みを有する。欧米では約50-60%の妊婦が鎮痛薬を使用すると報告されているが、本研究の妊婦においては妊娠第1期約6% 第2-3期約12%と諸外国と比較して妊婦の鎮痛剤使用は少ない。

考察:(研究の限界を含める) 妊娠中の身体の痛みに対する薬物治療の実施割合が諸外国と日本とで大きな差があるのは、日本において痛みを耐えることが美德であるとする文化背景が影響しているのかもしれない。例えば、痛みに対して一般的に用いられる非ステロイド系鎮痛薬(NSAIDs)は妊娠後期の使用で動脈管開存症をもたらす可能性があり、妊婦の痛みに対する薬物治療に対しては注意が必要である。運動療法などの非薬物治療についても検討されるべきである。本調査は薬物使用を自己報告しているため、報告が正確でない可能性がある。また、薬物の使用目的を調べていないため、感冒の解熱に対して鎮痛剤を使用している可能性も含む。

結論: 日本でも妊娠中、高率に身体の痛みを伴うが、欧米諸国と比較して日本では妊娠中に痛みに対する薬物療法を実施する割合がとて低く、強い身体の痛みがあるが適切な治療を受けられていない日本の妊婦に対して、何かしらの適切な治療やサポートが必要かもしれない。